俺の先輩はギャルゲーで世界を救う！？

秋ノ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の先輩はギャルゲーで世界を救う！？

【Ｎコード】
Ｎ１７２１Ｚ

【作者名】
秋ノ君

【あらすじ】
ここはジパングの最南端に位置するシカゴ島。
俺の名前は玉露（ぎょくろ）　秋（あき）。この島の『プロテエース学園』の２年生だ。
この島の学園は普通の学園とは少し違って、変わった人々が集まっている。簡単にいえば、普通の社会生活では生きていけないような『能力』を持つ人々が集まっている。

そんな学園で俺は山石先輩と出会った。彼は世間一般的にいう『オタク』と呼ばれる存在である。そんな先輩の能力は『2次元を3次元に召喚する』という、オタクにとっては願ったり叶ったりの能力である。

『能力』を持つ人間が集まるこの学園では、日々争い事が絶えない。その争いも穏便だといいのだが、中には危険な能力者もいる。

その能力者は『リコビナー』と呼ばれ、それぞれに派閥を持つ。一応、山石先輩もこのリコビナーと呼ばれる特別な存在だ。

この戦いがこの島だけだと良かったのだが、世界の国々にも同じ様に能力者がいて、能力者を軍事力として戦争への投入が始まった。

果たして、俺の先輩は世界を救うことができるのか！？

プロローグ（前書き）

友人を冗談交じりにからかうために、書き始めたのがきっかけです。そして、書いていて楽しくなったので、頑張って書き続けていきたいと思います。

プロローグ

ここはジパング最南端のシカゴ島にある『プロテエース学園』の４階、２年Ｓ組の窓側の席である。彼の名前は玉露（ぎょくろ）　秋（あき）、ご察しの通り、この席の住人だ。

今は英語の授業中で、秋はこの退屈な時間をどう過ごそうか、ぼー　っと窓の外を見ながら考えている。階下のグランドを見れば、いつもの様に砂煙が舞い上がっていた。

「……今日も飽きずに派手にやってるな」

「授業中にも関わらず、グランドの女子を見つめているとは、さすがだな」

隣席の男が汚いごみを見るような目で、秋を見ていた。

「いや、紅真。別に女子を見ているわけではなくてでな……」

身長は１８４　ｃｍ　の長身で体つきが良く、顔も中の上ほどの赤髪の彼の名は、土反（つちぞり）　紅真（こうま）。秋の隣人にして、親友である。ちなみに、秋は黒髪で中の中ぐらいの容姿、身長も標準的である。

「わかっている。少しからかっただけだ。それにしても、３年の体育は相変わらず激しいな。さっきから揺れが止まらない」

「……だな。この時間は確か……」

「３年Ｓ組だ。岩山先輩はちゃんと生きているだろうか」

「あの人は悪運強いから、大丈夫だよ」

「……それもそうだな」

紅真は納得したのか、居眠りを始めた。秋はその紅真を横目で見る。

紅真は頭はいいのけど、板書を取るのが苦手だったな。以前、ノートを借りたことけど、見事に罫線を無視して、文字が書かれていて、その文字はメソポタミア文明の楔形文字より読解不能だった気がする。

次の瞬間、雷鳴が轟き、窓の外に閃光が走った。振動が空気を伝達し、その衝撃で窓が激しく前後に揺れた。

「……まっ……大丈夫だろう」

この学園は普通の学園とは違って、変わった人々が入学している。簡単にいうと『能力者』が集まっている。入学条件は、何かの能力を持っている事だ。例えば、火を操る『プロミナンス』、肉体強化を得意とする『ウィルド』、魔法使い『スペリス』、超能力者『エスパー』などがある。

能力者は力のために、一般社会では生きていけない。要するに社会不適合者、社会から迫害された者が集まっている。

そんな学園の体育は、実践課外としてクラス同士で『戦闘訓練』を行っている。

クラス分けは、Ｓクラスを筆頭にＥクラスまでに能力の程度と学力で分けられている。だけど、Ｓクラスが一概に優れているとは限らない。中には能力を隠している者もいる。付け足すなら、能力の優劣に年齢は関係ない。また、個人の能力は、ＥＣＬ（Ｅｆｆｅｃｔ Ｃａｐａｃｉｔｙ Ｌｅｖｅｌ）で表され、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ でランク分けされている。ちなみに、紅真はＥＣＬがＡ

のプロミナンスである。

そして、Ｓクラスの戦闘訓練ともなると、さっきほどの様な激しい戦闘が行われる。

「っと、このような一風変わった学園に、俺たちは通っているのだ」

「……秋……大丈夫か？　さっきから、独り言を言っているようだが」

「心配するな！！　これも仕事だからな」

親指を紅真に突き出してやった。紅真は、ダメだこいつ、と呟いて、教科書に視線を落とした。

「では、玉露。教科書３５ページの３行目から訳してみろ」

不意を突くように教師が秋を指名した。授業中に私語をしたり、窓の外を見て黄昏ていたら、当てられて当然だと思うけど、興味のない授業を聞く気にはなれない、と秋は心底嫌そうな顔したが、仕方なく椅子から立ち上がった。

「Ｖｅｒｙ　ｏｆｔｅｎ　ｔｈｅ　ｆｏｒｍａｌ　ｗｏｒｄｓ　ｗｅ　ｌｅａｒｎ　ｉｎ　ｃｌａｓｓ　ａｎｄ　ｆｒｏｍ　ｔｅｘｔｂｏｏｋｓ　ａｒｅ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　ｆｒｏｍ　ｔｈｏｓｅ　ｕｓｅｄ　ｉｎ　ｃｏｎｖｅｒｓａｔｉｏｎ　ｏｕｔｓｉｄｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｃｌａｓｓｒｏｏｍ．　Ｉｎ　ｓｕｍｍａｒｙ，　ｙｏｕｒ　ｃｌａｓｓ　ｉｓ　ｖｅｒｙ　ｔｉｒｅｄ　ｆｏｒｍｅ．　Ｄｏ　ｙｏｕ　ｆｏｌｌｏｗ　ｍｅ　？」

教室中が沈黙した。教師の顔もひきつっているようだ。

「……日本語に訳せと言ったのだが」
「もしかして、先生は俺の言っている意味がわからなかったのですか？」

誰がこんな退屈な授業に参加してやるか、と秋は心中で呟いた。

「もう座ってよろしい……」
教師もそんな態度の秋に呆れたのか、折れてしまった。
「ありがとうございます」

嬉しそうな顔して秋は席について、再び窓の外を眺める。
雲が流れていき、グランドからの衝撃波がなくなると、退屈な授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

●

授業も終わり、昼休みの時間が訪れ、教室は生徒たちの会話で賑やかになる。

「紅真、学食に飯食べに行こうぜ。何食にする？」
「今日の気分は八食。担々麺が食べたい気分だ」
「なる。じゃあ、八に行こう」

プロテエース学園の学食は十箇所あって、食堂毎にメニューや値段も異なっている。その他にも、学内には購買やコンビニ、個人系の店まで完備されている。そして、なぜかデパ地下並みのデザートの品揃えの良さを誇っている。どうやら学園長の趣味が影響しているようだった。

「この様に、わが学園は食事に関しては苦労しないのだ！！」
「お前、本当に大丈夫か……もう帰ったらどうだ？」
「心配無用だ！　金を貰っているからには、働かないといけないのだよ」

と、秋は拳を突きだして、宣言した。なぜだか、俺には説明しなくていけないのだよ、その様に秋は義務感を感じていた。

「もういい。喋るな」

紅真は秋を置いていく速さで、綺麗に選定された中庭を通りぬけ、第八食堂を目指して歩いていった。

「待ってくれよ、紅真！　ちょっ、そんな他人の振りをしないでくれぇぇえ」

中庭に秋の声が虚しく響いた。

●

「お前ってさ、本当に辛いの好きだよな。担々麺に七味を一瓶も加えて、よく食べれるな」
「一瓶入れると、七味が浮いてくるのが難点だ。もっと少量で辛くなればいいのだが」

秋達は教室ではなく、研究室にいた。午前は講義棟で授業を受け、午後からは研究棟の研究室で過ごす。研究室には、それぞれ担当の教師が割り振れられていて、更に科で細かく分けられている。そして、彼らは「有馬研究室特務科」に所属している。

「やぁ、二人で何を話してるんだい？」
「お疲れ、令。紅真が担々麺に七味を一瓶入れるんだけど、どう思う？」
この糸目の爽やかな男の名は、月雨（つきあめ）　令（れい）。秋と同じ2年S組のクラスメイトで、結構女子からの人気がある。
「僕は辛いの苦手だから、無理。っていうか、担々麺でさえ食べれないしね。余談で聞くけど、どこの担々麺を食べたんだい？」
「八だ！！あそこの担々麺は最高だ！！」
普段寡黙な紅真が即座に反応した。心なしか目が爛々としている。
「八の担々麺は激辛で有名じゃないか！？　なんでも完食できるのは学園で二人だけだとか……」
令が言う通りに、第八食堂の担々麺は激辛で有名である。そのスープの色は、地獄の海の様に真紅で、スープの香りで普通の人なら倒れてしまうほどの激辛。それに更なる辛さを求め、七味を投与するのが、七味とにらめっこをしている紅真である。
「……まさか、伝説の男が同じ研究室だったとは知らなかったよ」
「そんなこんなで、俺らは食堂に行っていたわけさ。令は、今日も文夜ちゃんと一緒だったのか？」
「そうだよ。文夜なら、購買でデザート買ってくるって言っていたから、そろそろ、来るんじゃないかな」
今、話題にあがっている女の子は、鴉羽（からすばね）　文夜（あや）。この有馬研究室特務科、略して有研特科の一員で、1年A組所属、それで令の彼女である。

「こんにちは。あれ？　なんで玉露さんは部屋の隅を見て、人差し指を立てて、ドヤ顔で決めポーズをとっちゃってるんですか？」

黒髪のショートカット、綺麗な二重の元気っ子がビニール袋を片手に入ってきた。藤の花を模した髪飾りが良く似合っている可愛い感じの女の子だ。その子の傍に令が近づいていく。

「文夜、気にしたら負けだよ。それで、何を買ってきたんだい？」

完全に無視をされてしまった、と秋は肩を落とした。二人はそのまま秋を道端に転がる石の様に無視して席につき、文夜の買ってきたデザートを仲良く食べ始めてしまった。

「……本当に仲が良いよな、あの二人。俺もあんな彼女が居たら楽しいだろうな」

心配そうな顔して、周囲を見回した後に、紅真が俺を見る。どうも誰かの姿を探しているようだ。

「秋、そんなこと言っていいのか。萌実さんに聞かれたら……」

「ああ、めぐの事なら大丈夫だよ。今頃、デザートパラダイスで食後のデザートでも食べている頃だから」

「そうか。それなら血を見なくて済みそうだな」

「ああ。心配してくれありがとうな」

朱鷺宮（ときみや）　萌実（めぐみ）。３年Ａ組で、山田研究室先攻科に所属している女生徒である。

それはさて置いて、俺たちの長は一体どこで油を売っているのだ、と秋は携帯の画面を見る。

「山石先輩遅いな……そろそろ、研究訓練が始まるっていうのに……」

研究訓練は能力者のデータを取るために、研究室同士で模擬戦闘を行う研究実験。そもそも、この学園は能力者のデータを取るために存在しているので、こっちが学生の本業である。

「全員揃っているか？」

ちょっと小太りで、白衣をまとい、無精ひげを生やした眼鏡の男性がカルテを片手に研究室に入ってきた。

「有馬先生。山石先輩がちょっといないっす」

「誰か見てないのか」

「俺はずっと紅真と一緒だから見ていないし、令も文夜ちゃんとご飯だったから、誰も山石先輩とは一緒ではありませんでした」

「……そういえば、先程本屋で立ち読みしていたところを見かけましたよ」

令がケーキをさしたフォークを片手に、こちらを向いて呟いた。研究室内の視線がすべて入口のドアに集中する。そして、ドアが開き、短い髪を整髪料でセットした小柄な黒縁眼鏡の男が入ってきた。

「こんちわーす。いや、遅れすみません。新刊が出ていて、財布とにらめっこしていたら遅くなっちゃいました」

遅れてきたにも関わらず、自責の念が全く感じられない挨拶であった。この人物が、この研究室最後の一人、山石一斗（やまいしいっと）。3年S組所属にし、この研究室のリーダー的存在。なのだが、少しというか全

く風格がないのが偶に傷だ。山石が来たことによって、有研特科の所属者たちが全て揃った。

３年Ｓ組　山石　一斗（ＥＣＬ：Ｓ）。２年Ｓ組　玉露　秋（ＥＣＬ：　Ａ）、同じく土反　紅真　（ＥＣＬ：Ａ）、月雨　令（ＥＣＬ：Ａ）。１年Ａ組　鴉羽　文夜（ＥＣＬ：Ａ）。

秋は再びドヤ顔を決めて、窓の外を指さしていた。

「おい、あいつは大丈夫なのか？」

「有馬先生、あいつは今日ずっとあんな感じだから、放置が吉だ」

「そうか」

「おい、紅真。そんな腫物を触るような感じで話すなよ。ちゃんと、ここからはまじめにやるからさ」

これで一応、俺の仕事も終わり、と秋は呟いて、ドヤ顔をやめた。

この様な日常を彼らは過ごしている。

「では、訓練棟に移動する。各自、準備をして訓練棟に集合」

そして、訓練棟に向かって移動を始めた。

プロローグ（後書き）

なんとか無事にここまで、形にすることが出来ました。初期の作品よりは良い出来になっていると思います。その証拠かはわかりませんが、こちらの作品の方が書いて楽しいです。どの作品も私にとっては子ども同然。これからも精進致しますので、ここまで読まれた方は何卒よろしくお願い致します。

狂気の森～Ｆｕｒｏｒ　ｓａｌｔｕｓ～

……今日のフィールドは森林か

あらゆる状況での戦闘を想定して、様々なフィールドがこの訓練棟には用意されている。ここは、その中の森林フィールド。確か、聞いた話によると、熱帯地域の密林を模して作られている。

「今日の対戦相手は、黒瀬研究室魔法科だったっけ、令」

「ああ、確かそのはずだったよ」

「今日は黒研の魔法科ですか。私、あそこの人たち苦手なんですよね。巫女服がいたり、全身黒装束だったりして、ちょっと不気味じゃないですか」

魔法科は制服を着用せず、基本的にオリジナルの服装で過ごしている。そのためか、学内ではすごく目立ち異色のオーラを放つため、文夜が苦手に感じるのも仕方がないのかもしれない。

「巫女服はいいよな。確か、どこかの同人誌でも巫女キャラが人気投票一位だったし、神様に使える職だから清楚さ何倍増しにもなる、白衣と緋袴のコントラストも最高じゃないか　という意見も多数確認されている。要するに巫女服は結構需要があるんだよな」

しかし、興奮している人物が若干一名いた。彼の名前は、言わなくてもいいだろう。

……相変わらずというか、緊張感に欠けているよな。

「山石先輩って相変わらず、守備範囲広いっすよね」

「俺はお前みたいに、シスコン属性オンリーではないのだよ、秋」

「……やっぱり、秋はシスコンだったか」
「先輩、適当な事を言わないで下さいよ！　紅真も納得して、うなずくな！」
……最近はこんな風にシスコンネタでからかわれるのが、定番になってしまったな。本当に不本意な結果です。
秋は頭を抱えて、悶えている。そこに、更なる追撃が行われた。
「あっ、そういえば今日の戦闘訓練の相手は変わったんだよね。巫女服が見れなくて残念だよ」
秋は山石先輩の発言が気になった。
……訓練相手が誰であろうと別に関係ないけど、急に変わるのは珍しいな。
「それで、どこに変わったんですか？」
「山研突科だよ。昼休みに朱鷺宮さんが、俺のところに来て、是非うちとやりたいんだとさ。断る理由もなかたし、有馬先生にも話を通しているみたいだったから、承諾しちゃったよ」
「――――山田研突撃科！？」
秋は背筋に悪寒を感じた。
萌実が直接交渉したってことは何か裏があるはずだ。今日の出来事を必死に思い出せ。
そして、秋の表情が凍りつき、顔には冷や汗が浮かび上がった。
「秋、大丈夫じゃなかったのか」
「そのはずだったんだけど、どうも大丈夫じゃなさそうだよ」

紅真も察したようだった。同じ様に、令と文夜も心配そうに秋を見ている。
俺は優しい仲間を持てて、幸せだったよ。
秋がその優しさを噛みしめていると、萌実達が入ってきた。

「有馬先生、この度は私のわがままを受理してくださり、ありがとうございました」
「いやいや。お安い御用だよ。それに、こんな品までもらっては断れないだろ」

先生の手には、魔城と書かれた褐色の瓶が掲げられていた。

「この酒は滅多に手に入らないから、こちらこそお礼を言いたいぐらいだ。ガハハ、感謝しているぞ、朱鷺宮」
「いえこちらこそ感謝しています。では、本日はよろしくお願いします」

お辞儀をして頭を上げた後に、萌実は秋を見た。萌実は身長が１７１　ｃｍでモデル体型、銀髪のサイドテールが印象的なお姉さんタイプ。傍から見てもすごく綺麗な女性だ。

「秋、覚悟は出来ているんでしょうね？」
「……いえ、あれはですね……」
「言い訳は終わってから、ちゃんと聞くから安心していてね」

満面の笑みで秋を一瞥して、研究室の仲間達の元へ駆けていった。笑っているようで、笑っていない笑顔が秋に恐怖を植え付けた。当の秋は、

「いや、勝てば大丈夫なはずだ。勝敗はリーダーの戦闘不能だから、俺が萌実に殺られる前に山石先輩が戦闘に不能になれば、まだ生き残れる可能性はある」

と何やら念仏を唱えているようだった。そこに更なる追い打ちが、

「ちなみに、今日のリーダーは秋、お前だからな。逃げるなよ」

「――――！！　先輩、それ、どういう事ですか！？」

「朱鷺宮さんって怖いだろ。俺は逆らえないからさ。存分に戦ってこい」

山石はそう言い終えると、秋の肩を軽く叩き、戦闘配置につくため移動していった。

そんな、俺に死ねっていうのか。それよりも萌実はこんなところまで、手を回していたのか。

……本当に用意周到だよ。

秋は半ば呆れ交じりに宙を仰いだ。

「秋、ちゃんと帰ってこい。帰ってきたら、八食の坦々麺を食べに行こう」

「今回はお前が悪いから、ちゃんと反省しなよ」

「先輩、浮気はだめですよ」

次々に秋の背中やら肩を叩いて、それぞれが戦闘態勢に移っていった。

覚悟を決めるしかないようだな、と秋は気持ちを切り替えて、戦闘の準備を始める。

そこで、拡声器から有馬先生の声が響き渡った。

「では、それぞれが戦闘配置についた様なので、これより『有研特科』と『山研突科』の戦闘訓練を行う。勝敗はリーダーの戦闘不能をもって決定する。では、戦闘開始」

狂気の森～Ｆｕｒｏｒ　ｓａｌｔｕｓ～（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ないです。良ければこれからもよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1721z/

俺の先輩はギャルゲーで世界を救う！？

2011年12月15日01時45分発行